

# 開放的なことを自分で考える必要性

ここ 10 年、日本においては、暗い顔をしている人が増えた。その要因は今の日本社会は限界点に達している。そこで、その現状から脱却するための考え方（思想方法）を挙げてみる。

## 【1】日本の現状

ここ 10 年の日本は、社会問題の深刻化が進んでいる。教育問題（受けられる教育水準の格差→人生のスタートラインで差がついてしまう→不公平）・地域格差や所得格差の問題・医療問題（医師の減少）・雇用問題（非正社員の増加）・うつ病や自殺や犯罪の増加等の社会問題が顕在化した。

その要因の 1 つは日本の政治にある。元小泉総理は、弱者切り捨て政策（社会保障費等の削減→それによるサラリーマン・高齢者の負担増、派遣社員の規制緩和→非正社員の増加、市場経済万能型政策→これにより格差拡大など）を行い、それにより歪を発生させた。歪を是正するために政治を行なうはずであった元安部総理・元福田総理は、ねじれ国会により意見が通らないのを理由に政権を投げだした。さらに、自民党は総裁選に 5 人も出馬させ、前代未聞である冒頭解散をするなどを考え、国民のための政策を行なう力量も無いのかかわらず、国民をだましてまでも選挙に勝つために必要な支持率を上げようとしている。これらを見るかぎり、国民のことを本当に考えているようにはみえない。これでは、国民は立場が弱いままである。民主党に政権を譲るべき状態まで来ているが、果たして民主党は、どこまで政権運営ができるかどうかは未知数である。これが日本の政治の現状である。

特に雇用問題（非正社員の増加）・うつ病や自殺や犯罪の増加に関しては、企業が大いに関わっている。会社は、コストを削減するために非正社員（主に派遣社員）という形態で雇用している。また、役職という権力を使い、現場の実情を無視し、サービス残業をさせて成果を求める。これらは、自社の利益しか考えていなくて、会社が儲かれば、手段は選ばないという会社があるからである。非正社員は保険等に加入していない上に、いつ解雇されるかが分からない状態である。一方、正社員は安定しているものの、無理な成果を求められ、肉体的にも精神的にも強い負荷がかかる。会社を辞めたいという人も多くいる。しかし、会社を辞めてしまうと、転職活動が大変であるので、仕事を続けても地獄、辞めても地獄であることから、死にたいと思っている人もいる。したがって、会社の幹部を除くサラリーマンは立場が弱い。

もちろん社会問題の顕在化は政治・企業だけの問題ではなく、日本社会全体の問題である。これらの問題を考察するには、日本社会全体の本質をみる必要がある。したがって、日本社会の本質を分析し、そこにどのような問題があるのかを考察する必要がある。

## 【2】日本社会の問題点

ここから、現代の日本社会の特徴と問題点について、いくつかみてみる。社会学の専門用語を使用することもあるので、ここで用語の説明をしておく。アメリカの社会学者アルヴィン・W・グールドナーによると、知識(knowledge)には、2 つの意味・あり方があるという。彼はそれを「情報」(information)および「明識」(awareness)と呼び分ける。普通、一般にサイエンスと呼ばれている学問が日々追求しているのは、「情報としての知識」である。これは基本的に自然界・人間をコントロールようにするために生産される知識で、これを今まで研究してきた。したがって、「情報としての知識」は「技術的知識」である。これに対して、明識は文字通り「自覚」を意味している。人間自身の関心・問題に関わりのある知識である。このことを「明識としての知識」という。「情報としての知識」は客観性のもとに自分自身の存在を禁欲的に度外視してしまうのに対して、「明識としての知識」は

社会的世界について、常に自分自身との関係で反省的に理解するための知識である。したがって、これを「反省的知識」という。

現代社会は、高度な技術的知識をもつ専門家エリートが強い影響力を行使する社会である。官僚・会社の幹部はその道のスペシャリストであるかもしれないが、一方それ以外の実情をみる能力は低く、素人は官僚・会社の幹部に逆らうことは難しい。これにより、政治問題（官僚基準で客観的に考えているため、国民の実情から離れている政治）・教育問題（社会に出て必要な能力と現在の教育方法は異なっている点が多い）・成果主義等の歪（会社の利益を第一にしているため、社員のこと考えていない）が発生している。このように、深刻な社会問題を引き起こす問題の一因になってきた。現代の日本社会において、自分自身の生活と生き方を自覚的に反省することを可能にする基礎知識が欠けているといえる。（反省する意欲もない）

わたしたちは毎日の生活のなかで同じようなことをくりかえしている。日常生活(everyday life)とは「くりかえし」である。毎日決まりきったことをくりかえすことによって、わたしたちは日常生活をあたりまえのことと考えている。いや、それに関しては考察をしていない。[たとえば、主婦が食事の用意をしたり掃除や洗濯をする。子供が学校に行く。会社の上司・お客様に頭を下げる。税金を納める。あいさつをする。など]ルーティーン化した行動には、自覚的知識や知的判断が欠けていることが多い。これらのことをするとき、わたしたちはなぜやるのかを悩んでいない。それはごくあたりまえのことであるからである。これを「日常生活の自明性」という。そして、自明性をもった知識のことを常識的知識と呼ぶ。わたしたちはこの「常識的知識」にしたがって、ルーティーン化した日常生活という「自明な世界」を生きている。また、日常生活は堅い社会的な殻に覆われているといえる。たとえば、国家がそうである。まず、税金を納める必要がある。また、仮に良いことであっても、犯罪を犯すと逮捕され、刑務所に收容されてしまう。それらを拒否することは困難である。会社もそうである。会社の歯車となって働く人は、自分を犠牲にしている。これらには全て強制力があり、特にそれに抵抗する場合に顕在化する。一方、人間は「お金のため」「会社のため」ならば、なんでもやってしまう。たとえば、特に金融の営業職にみられることであるが、会社が儲かるために、お客様に口座等を作り、入金させるためなら、お客様のことを考えずに騙すような手法で営業をしている。これでは、キャッチセールスやヤクザみたいである。良心的な心は、一体どこにいつてしまったのだろうかと思う。このような人間を見過ごすわけにいかない。そのことから社会の自明性とは、とても堅い殻であるといえる。一方、わたしたちの日常生活の様々な仕組みを正確に「知っている」のではなく、漠然と「信じている」だけである。人々が共通に思いこんでしまうことで、その現実自明なものとして正当化され、その結果、人々の疑問を封じ込めてしまう。「いかにも確からしい」と思える日常生活の現実の本質は、一種の約束事の世界であるということである。

日本社会の特徴としては、何か物事を進めるときは、常識に従う傾向がある。特に自分で物事が判断できることでも、官僚・会社の幹部が命令を出せば、こちらの方が優先されてしまう。仮に自分の方が知識があっても、上の人の意見が優先されてしまう傾向がある。もっとも、これも日本の常識でもある。常識に従えば、無難に物事が進むかもしれない。しかし、物事が行き詰ったときに、そこから脱却することがなかなかできない。それでは、いつまでも新しいことはできない。今の日本社会はそこに問題点があるといえる。だから、今の日本社会は限界点に達しているといえる。

### 【3】社会とは

日本社会の問題を改善するためには、どのようにすれば良いのかを考える必要がある。それを考察するためには、社会とは何かを把握する必要がある。ここでは、それに関して試みる。

現代の日本においては、わたしたちの普段なにげない行動がはっきりと目にみえない形で社会のあり方や文化現象を生みだしているが、ドラマティックなことは少ない。しかし、現在の社会制度は、人間たちの社会的行為の歴史的集積にちがいない。したがって、社会は人間の産物である。しかし、社会は個人にとって、強制力をも

つようになる。これにより、人間がそれらをつくっているということが見えなくなってしまう。このことから、社会は客観的な事実ともいえる。さらに人間は社会から教育を受けるようになる。これにより、人間は社会の産物ともいえる。

社会形成のプロセスにとって「意図せざる結果」はつきものである。それは、そこには必ず「軸の回転」と呼ばれる現象が生じるからである。「軸の回転」とは、もともとの目的や意図などの内容を含んだ生の全体から、しだいに形式が分離し、やがて自立性をもつようになることである。これは社会的形成の必然的なプロセスである。たとえば、政治や会社などである。政治は、本来なら国民のために国会などで意見をまとめ、それを実行することである。しかし、その権力を利用し、『財税改革』といった名目で増税をし、官僚の金儲けのための政治になってしまうことがある。会社についてであるが、平社員の意見の通りやすい個人経営の会社があった。しかし、その会社が大量資本の株式会社に成長した場合、平社員の意見が通りにくくなることがある。それらの問題が、現代社会の様々な歪を生みだしている。

## 【4】現状から脱却するための方針

現状から脱却するために、日本社会の問題点をどのように改善していくかを考察してみる。わたしたちは、日常生活をあたりまえのことと思っているが、日常生活が一度崩れると、立ち往生してしまう。いわゆる、周囲を取り巻く環境が変化するときである。そのときに、はじめてそれまでの日常生活が実に複雑なメカニズムで成り立ち、しかもいかに疑問の多いものであったかが分かる。周囲の環境が変化することにより、必然的に日常生活を見直すことになる。これは、日常生活を見直すためのいいきっかけではあるが、周囲の環境の変化を待っているだけでは、現状を変えるのは難しい。やはり、自力で日常生活を見直す意欲が必要である。常に日頃からいろいろな物事を考えてみる必要がある。

まず、常識となっている知識や考え方・価値観を徹底的に疑ってみる。これは社会学の第一の発想法である。たとえば、[主婦が食事の用意をしたり掃除や洗濯をする。会社のお茶くみは女性の仕事である。会社の命令に社員は絶対に従わなければならない。若いことはすばらしい。犯罪者は悪い人間だ。]などの常識的知識や通念である。ここから、具体的な方法について試してみる。裏を返して考察する方法がある。たとえば、[若いことはすばらしい→老人になったらだめということか、犯罪者は悪い人間だ(必ずしも悪いといえるのか)→そうでない人は必ずしも良い人間とは限らない、政治家や官僚・会社の幹部は偉い(本当か?)→そうでない人はダメな人間であるとは限らない]などのように考えてみる。このようにすることにより、広い視点で物事がみることができるようになる。日常生活の自明性に対して反省的にとらえる良い方法としては、異邦人(よそ者)の視点でみることである。異邦人(よそ者)は、ある共同体における人々が、あたりまえとみなしているほとんどのことに疑問をつける存在である。その結果、異邦人は自明性におおわれた日常生活から、元々もっていた原理的な意味を人々に気づかせる力をもつ。逆に、自分たちの社会を研究するときには、その社会を知るために社会の外部からの視点でみる必要がある。

一方、自明性の根底を科学的に分析することも大切である。たとえば、会社の命令に従う理由は、会社の利益のために労働することにより、労働賃金をもらうからである。このように、会社の命令に従う意味を考えた後、本当に会社の命令に社員は絶対に従わなければならないのかを考えてみると、より深く考察することができる。例として、簡単ではあるが、実際に自明性の根底を科学的に分析した上で、私はこの課題の考察する指針をたててみた。会社の利益になり、それが本当に従業員に還元されるのであれば、会社の命令に従うとした上で、会社幹部が利益を得るための手段であれば、会社の命令に従わなければならないことを強く疑い、これに関する意見をまとめて、場合によっては、強硬手段をとるべきだという意見も書くかもしれない。このようにすれば、興味深い考察結果がでるだろう。

自明性の根底から脱却する方法をまとめてみた。

- ・自明視されていた世界の崩壊とともに、必然的に伴う社会構造の全面的な崩壊
- ・異文化接触によるカルチャーショック
- ・社会的に対抗する個人や団体

今まで、これらについて触れてきたことである。それから、自明性の根底を科学的に分析することも大切であるが、日本人はこれを強く意識し過ぎて、常識的知識を疑うのを拒む傾向がある。したがって、自明性の根底を分析しつつも、少しでもおかしいと思うことがあったら、積極的にその事柄を考察するべきである。自ら異文化に接触し、社会に対抗することが必要である。確かに、日常生活が崩壊することにより、現状から逃れられるが、それを待つのでは、なかなか現状から脱却することができない。

それに加えて、行為の意味を理解する必要がある。現代の日本においては、技術は世界一流の水準である。しかし、その技術のもつ本当の意味を考えていない。それは、あらかじめ決められた意味である。(固定概念)日本の技術のもつ意味は、一般的に「利便性・効率性を高める。輸出して利益を得る。」といったものである。これらは、いかにも相手が納得しやすいものである。しかし、それはその意味を問う人を満足させるものにほかならない。結局、「利便性・効率性を高める。輸出して利益を得る。」が前提で、そのようにすることにより、どのような意味があるかを考えていない。仮に考えたとしても、相手が納得するような回答しかしていないのが現状である。これでは、技術の発展という目的が達成したとき、一体何か残るだろうか。良くて、人間性のかつて達したことがない階段にまですでに登りつめたという自己満足的なものだろう。それでは、世の中は変わらない。その技術のもつ本当の意味を考えなければ、いくら技術が上達しても、本質は何も変わらない。現代日本を例に、いくらスキルが上達しても、本質は変わらないと説明したが、もちろん個人に置き換えてもそうである。いくら自分が持っているスキルが上達しても、固定概念にこだわるのなら(周囲の人に喜ばれる、就職を有利にする、金儲けをするなど)、人は変わらない。

他力本願ではなく、自分の力で自明性の根底から脱却し、行為の意味を理解することが現状から脱却する近道であるといえる。

## 【5】まとめ

現状から脱却する方法として、自明性から脱却することと、行為の意味を理解することと、若干社会学的にみてみたが、結局、固定概念にこだわらず、自分から物事を考察していく姿勢が必要である。本来であるなら、官僚(政治家)・会社の幹部や上司に、通念を破って常識を疑い、ものを申すべきであるが、現実的には難しい。現代日本では、飲屋等で愚痴を言う姿が目立っているのが現状である。愚痴を言うことで一時的なストレス解消になるが、実は状況は何も変わらない。もちろん、だからといって会社の上司等に文句を言えともいうことができない。そこで、まず少しでもおかしいと思うことがあったら、積極的にその事柄を自由な視点で考察するべきである。考察したら、それを自分なりに文章等でまとめてみる。そして、その事柄に関する改善策(現状から脱却する方法)を考える。あとは、それらを積み重ねて、機会をうかがい周囲の人間や世の中にそれを訴えていく。もちろん、世の中の人全員が賛同するわけではない。しかし、自分の意見を訴えることができれば、その意見を共有することができ、現状からの脱却につながる。要は世の中に対する不満をただの愚痴で終わらせるのか、自分なりの意見を持つのかの違いである。愚痴で終わらせず、愚痴から物事を考察することが大切である。

現状を変えるには、その要因になっているものを排除するために、物事を考察しなければならないが、日頃から様々な分野において、物事を考えることを心がげたいところである。今の社会においては、スピード重視であることから、物事を深く考察する人は少ないと思う。しかし、それでは今の状態すら理解することができない。特に今の世の中は問題が山積みである。このようなときこそ、物事をじっくり考えることも必要である。まず、自分の趣味でも良いので、物事を考察し、レポートしてみたらどうだろうか。ある程度は客観性も必要になって

くと思うが、学会などに論文を提出するわけでもないので、筋が通れば独断と偏見を認めてもよい。開放的なことを自ら描き考える人を増やすために、このような空間（当ホームページ）を作った。私も物事を考察していき、様々なレポートをここに掲載していく。

#### 参考文献

- ・野村一夫（1992）：『社会学感覚』文化書房博文社.P690.